
カタオモイ。

立華撫子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カタオモイ。

【Nコード】

N9636D

【作者名】

立華撫子

【あらすじ】

憧れの高校生活をスタートさせた、実由。目標は、青春を謳歌すること。そんな中、出会った先輩に一目惚れする。しかし、先輩には好きな人がいた。

プロローグ（前書き）

携帯からの閲覧を考慮し、改行が多くなっています。

プロローグ

——ねえ、先輩。

あなたの目には誰が写っているのですか？

あなたはいつも誰のことを想っているのですか？

——教えてください。先輩。

こんな想いをするなんて、夢にも思っていなかった。

苦くて切ない、カタオモイ。

サクラサク

「じゃあこのアンケート用紙を、望月^{モチツキ}。お前、集めといてくれ」

「えっ、何で私……」

「ちょうど目の前にいたからだ。頼んだぞ」

そんな理由はこじつげだ。

いくら何でも無理矢理すぎる。

現に、あなたの目の前にいたのは私ではないではないか。

反論しようとしているうちに、担任はさっさと教室を出ていった。
まった。

「あーあ、実由^{ミユ}、ツイてないね。ご愁傷様」

完璧に人事の顔をして言うのは、理乃^{リノ}。

アンケート用紙を親指と人差し指でつまんで、早速私の机の上に置いた。
いた。

「実由ちゃん大当りい！」

クスクス笑いながら、なな^{ナナ}もアンケート用紙をもって来て、理乃の置いた上に重ねて置いた。

「そんなこと言うなら、二人とも手伝つてよ！」

「嫌だ。面倒臭い。」

「当たり前くじ引いたのは実由ちゃんでしょ」

「もう！ 薄情者！」

ホームルームが終わって賑やかになった、ここ、一年七組の教室の中で、私達三人の一層大きな声が響く。

ぎゃあぎゃあと言い合って騒いでいるうちに、私の机の上には、一枚、また一枚とアンケート用紙が積み重なっていき、放課後の教室からは、一人、また一人とクラスメイトが減っていった。

そして気付けば、私の机の上には、アンケート用紙が山積みになっていた。

「はあ、何で私が……」

担任のバカヤロウ。

心の中で何度も叫ぶ。

しかし、私と理乃とななの三人だけになってしまった教室の中でどれだけあがいても、それは後の祭りだった。

これ以上騒いでも虚しいだけ。

仕方ない。諦めて、素直に担任へのボランティアをすることにした。

きちんと全員分揃っているかチェックするために、教室の後ろのロッカーの中から名簿を一枚取って来る。

これだけ全部数えて集計するとなると、何だか気が遠くなりそうだな。肩をあげて、大きなため息をついた。

「しかし、中学生の時に所属してた部活なんて調べて、どうするんだろうね」

四方八方を向いた紙の山を、一つの方角に揃えながら理乃が言う。

「校訓が文武両道、だからかな？」

左手で頬杖をつき、右手に鉛筆を持って、ななが言った。

「えっ、二人とも手伝ってくれるの？」

さっきまで手伝う気がなさそうだった二人が、手伝ってくれるようなそぶりを見せるので、何だか二人の姿が仏様のように見えてきた。

「あんたが帰るの遅くなると、私達も巻き添えだからね」

「そうそう、理乃ちゃんの言う通り」

一瞬仏様のように見えた二人の姿は、すぐにいつも通りの姿に戻った。

ヤッパリ、モツベキモノハ、トモダチネ。

そんなお決まりの台詞を言うために開けた口も、自然と塞がってしまった。

「……まあいいや、ありがとう」

やると決めたらさっさとやる。

こじつけによるボランティアの為になんて、少しの時間でも勿体ない。

私たちは早速作業に取り掛かった。

理乃が名前と部活名を読み上げる。

私は名簿にレ点を打ち、その横に所属部を書く。

ななは別の紙に『正』の字を並べて集計した。

紙の束が、理乃の手元から机の上へと、少しずつ移動していく。

一年七組の教室には、理乃の声と私とななが動かす鉛筆の音に混じって隣のクラスから聞こえる笑い声や、運動場から聞こえる掛け声やピストルの音が響いた。

ななの書いた正の字が、完成前の正の字の中に四つ完成したところで、理乃の手元から紙がなくなった。

「終わったあ」

「んーお疲れ」

三人で両手を挙げて背を伸ばした。

本来の約三分の一の時間で、担任へのボランティアは完了した。

モチツキミユ
望月実由、十五歳。

私はこの四月、憧れの高校生活をスタートさせた。

長いようで短かった、受験生としての生活を終え、どうしても入りたかった、この葉月高校の制服を着て、私の心には満開の桜が咲いていた。

高校三年間の私の目標、それは、青春を謳歌すること。

友達とのスクールライフ、甘い恋。

——それと、大学進学のための勉強……

大人が口を揃えて『一番楽しかった時』と言う高校生活に、私はたくさんの夢を抱いて校門をくぐった。

この古びた校舎も、一人一人に割り当てられた机も椅子も、使い慣れたシャープペンも、何もかも、私には輝いて見えた。

入学してすぐに、親友とも呼べる関係になりそうな友達も出来た。

ロングでさらさらの黒髪に、目鼻立ちのはっきりした美人顔のクールな女、ススムラリノ鈴村理乃。

声優にでもなれそうな高い声に、くりっとした瞳。

ウェーブがかかったボブがよく似合う、誰もが守ってあげたくなくなるような、シノサキナナ篠崎なな。

クラスで一目置かれた二人は、チビで色の白さだけが取り柄の私には釣り合わない。

私は二人に劣らないよう、毎朝、肩の少ししたまで伸びたくせ毛をヘアアイロンで伸ばし、近所のドラッグストアで買った、目が二倍の大きさに見えるマスカラと、泣いても落ちないアイライナー、『今一番売れています』のホップがついたリップグロスで、慣れない手つきで顔を作った。

そんな努力の甲斐あって、私はどうやらクラスでは、二人と同じ階級として見なされているらしい。

高校生活の出だしは絶好調！　あとは恋を探すだけ。

でも、それが問題だった。

クラスの男子は、両極端で、友達としてはいいものの、恋愛対象にはならない。

クラスの中でも上流階級と言うような、いつも髪型や服装を気にしているグループは、あちこちに跳ね回るスパーボールのように、たえず弾けている。

話し掛けてはみたものの、猛烈に話すそのスピードには、笑うことしか出来なかった。

集団でいることを好まないのか、休み時間も自分の席を離れず、本を読んだり、携帯をいじったりしている男子は、話し掛けようにも、半径一メートルに決壊が張ってあるようで、近づこうにも近づけない。

先輩は、私とは比べものにならないくらい大人っぽい。

背は高いし、制服も着慣れた感じがして、貫禄がある。
中には髭を生やしている人もいる。

中学生の時にはいなかった種類の人がたくさんいる。

中学と高校の差はすごい。

まるで別世界に来てしまったようだ。

しかし、この三年間という限られた時間を少しでも無駄にするわけにはいかない。

私はその差に戸惑いながらも、毎日、高校生活を満喫する術を模索していた。

「じゃあ、職員室にこれ持ってくね」

「おー、いつてらっしゃい」

集計したアンケートを手に、教室を出た。

職員室は、北舎の一階だったはずだ。

まだ入学したばかりの私は、特別教室の位置がイマイチよくわからない。

特に北舎は、三年生の教室と、いくつか特別教室があるだけなので、利用することはもちろん、行くことすらもほとんどなかった。

渡り廊下を渡って北舎に向かう。

窓から、ポカポカとした優しい春の日差しが差し込んでいる。
この間まで満開だった桜の花は既に散り、青々とした葉っぱが繁り始めていた。

ひなたぼっこをすれば、いくらでも昼寝できそうな麗らかな気候にうっとりしながら、ぼーっと窓の外を眺めて歩いていた。

——ドンッ

「いったあ……」

何かにぶつかって、顔を強打した。

その瞬間、持っていたアンケート用紙を手から離してしまった。
紙の山がひらひらと舞い、床一面に広がる。

せっかく出席番号順に揃えたのに、台なしになってしまった。

「ごめんね、大丈夫？」

頭の上から、人の声が聞こえた。
見上げると、上級生であるう男の人が立っていた。

「あつ、ごめんなさい!!」

そう、ぶつかったのは物ではなくて、人だったのだ。
よそ見をしていたので、全然気付かなかった。

私が戸惑っている間にも、その人は床に広がったアンケート用紙を集めてくれていた。

「はい、ごめんね。揃えてあつたんだよね?」

集めたアンケート用紙を手渡す、凜々しいけれどどこか優しい笑顔
を、春の光が照らした。

——ドキン

胸の中で何かが弾けた。

この感じはなんだろう。

今まで誰かの笑顔を見てこんな気持ちになったことはない。
耳たぶがどんどん熱を帯びていくのがわかる。

「じゃあ気をつけてね」

その優しい笑顔に金縛りにあっているうちに、その人は後ろを振り
返って、一步、二歩と歩み出してしまった。

「あつ、あの……」

今出るかぎりの声を振り絞って出す。

とは言っても、さっき理乃とななと言い争っていたときの、十分の

一にも満たない声だ。

その声に気付いて、さっきの人は笑顔ではなく、丸い目をして振り返り、足を止めた。

「あつ、ありがとうつ、ごつ、ごさいました！ ぶつ、ぶつかってしまつてごつごつ、ごめんなさい！」

焦っていたせいか、上擦った声で、たどたどしい話し方になってしまった。

クスクスと笑つて、その人はまた一步目を踏み出そうとした。

「待つてください！」

自分でも意識しない間に、何故か口が動いた。

声に反応して、その人は再び足を止め、こちらを向く。

自分から呼び止めておいて、どうすればいいのか。
何でもないです、ではあまりにも失礼だ。
とにかく何か言わなければいけない。

鼓動がどんどん加速する。

固く握った手に、じわつと汗がにじむ。

「おつ、お名前教えて下さい」

咄嗟に思い付いたのがこの質問だった。
何故私は、名前を聞いているのだろう。

理乃が聞いていたら、恐らく馬鹿にされるであろう一言。
自分でも馬鹿だと思って下を向いた。

「サカグチャマト
坂口大和だよ」

「えっ……」

返って来た答えに驚いて、まじまじと、そのどこか優しい顔を見た。

「サ・カ・グ・チ・ヤ・マ・ト。じゃあね」

そして再び私に背を向けて、一歩二歩と歩きだした。
その背中が眩しくて、後ろ姿が曲がり角へと消えるまで、私はずっと見つめていた。

坂口先輩……

問題だった私の恋は、たった今、動き始めた。

ぼんやりしている間に、また一日の約半分が過ぎた。

今は五時間目が終わった後の休み時間。

六時間目は体育館なので、移動教室の時間だ。

自分の席から立ち上がったクラスメイトは、三、四人で固まって、

次々と廊下へ出ていく。

また北舎へ行けば、坂口先輩に会えるだろうか。もう一度会いたい。昨日からずっと、坂口先輩のあの笑顔が頭から離れない。

何故あの時、名前だけ聞いて、クラスを聞かなかったのだろう。そればかりを後悔していて、今日一日の授業は、聞いていても右から左へと抜けていつてしまっていた。

——ボコッ

窓のむこうに見える北舎に目をやった瞬間、大きな音と共に、頭に激痛が走った。

「実由！！ さっきから何回呼んでると思ってるの！！」

目の前に、丸めたノートを持った理乃が、鬼のような形相で立っている。

「実由ちゃん、朝からずっとおかしいよ」

その隣で、ななが困ったような顔をして私を見る。

坂口先輩のことで頭がいっぱいで、どうやら理乃が私を呼ぶ声さえも、右から左へと抜けていつてしまっていたようだ。

「次、体育館だよ！ 早くしないと遅れる！」

時計を見ると、もう休み時間の半分が経過していた。

「えっ、嘘！？ ごめん！ 行かなきゃ！！」

私たちも早足で教室を出て、クラスメイトの後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9636d/>

カタオモイ。

2010年10月28日06時28分発行